

『一条撰政御集』の物語性-「色好み」を軸とした『伊勢物語』との比較を中心に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀬尾, 博之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/7368">http://hdl.handle.net/10291/7368</a>

## 『一条撰政御集』の物語性

——「色好み」を軸とした『伊勢物語』との比較を中心に——

A Comparative Study of the Difference  
between *Isemonogatari* and *Ichijōsessyō-gyosyū*

博士後期課程 日本文学専攻 二〇〇六年度入学

瀬 尾 博 之

SEO Hiroyuki

### 【論文要旨】

本稿では物語的家集の一つである『一条撰政御集』を取り上げ、主に『伊勢物語』と比較しながら、物語性の観点を中心に考察を行っている。二つの作品には類似点と同時に相違点も多く捉えられ、中でも『一条撰政御集』が『伊勢物語』から影響を受けたと見られる「色好み」のモチーフが作品間の大きな差異を内包している。

その一つとして、歌物語と物語的家集である同集では「色好み」のモチーフの利用において温度差が見られることがあげられる。それは『一

条撰政御集』が私家集という制約を持つことに起因するもので、同集が『伊勢物語』から「色好み」のモチーフを踏襲しながらも実在の伊尹が常に背後に意識されることになり、そのモチーフは十分に成熟することはない。それは、物語に隣接しながらも物語にはなり得ない物語的家集の特徴を垣間見せるものである。

加えて、両作品における「色好み」の概念の変化を見ることができた。『伊勢物語』が恋の情熱に真摯な「色好み」を描いているのに対し、『一条撰政御集』ではあくまでも日常的な恋愛における「色好み」の姿が見られる。そこには、十世紀後半という時代性も加味された『伊勢物語』とは距離をおく「色好み」が示されている。

【キーワード】 物語的家集、『伊勢物語』、色好み、藤原伊尹、虚構化

### 一. はじめに

『後撰集』成立前後の十世紀中頃に物語的な要素を持った私家集が盛んに作られているが、それらは長文化した詞書、三人称の語りなど歌物語に類似した構成を持っている。<sup>(1)</sup> その一つとして藤原伊尹の家集『一条撰政御集』があげられる。同集では「大藏史生倉橋豊蔭」と仮託された人物が設定され、特に一番歌から四一番歌までの第一部の構成は物語的家集と呼ぶにふさわしいものである。

本稿では同集を物語的な観点から考察するが、その際に『伊勢物語』を一つの手がかりにしたいと考えている。同集は『伊勢物語』から少なからぬ影響を受けていると見られ、場面設定や話の内容、表現などの面



大蔵史生倉橋豊蔭、くちをしき下衆なれど、若かりけるとき、女のもとにいひやりけることども書き集めたるなり。公事さわがしうて、をかしと思ひけることどもありけれど、忘れなどして、後に見ればことにもあらずぞありける。いひかはしけるほどの人は、豊蔭にことならぬ女なりけれど、年月を経て返事をせざりければ、負けじと思ひていひける

1 あはれともいふべき人はおもほえて身のいたづらになりぬべきかな女、からうじてこたみぞ

2 なにこともおもひ知らずはあるべきをまたはあはれと誰かいふべきはやうの人はかうやうにぞあるべき。いまやうの若い人は、さしもあらで上衆めきてやみなんかし。

「くちをしき下衆なれど、若かりけるとき、女のもとにいひやりけることども書き集めたるなり」とあることで、同集が実在の伊尹とは異なる大蔵史生とされる低い身分の人物に仮託された作品であることが示される。そしてそれは、同集の虚構性を印象付けるものである。

また、「若かりけるとき」とあるのは、同集が過去への視点によって構成されていることを示している。二番歌の左注にも「はやうの人はかくやうにぞあるべき。いまやうの若い人は、さしもあらで上ずめきてやみなんかし」とあり、それは『伊勢物語』初段の「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」、四〇段の「昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。今の翁、まさにしなむや」を想起させ、過去への視点を浮上させる。宮谷聡美氏は当該箇所類似について「『伊勢物語』四〇段が）明確に男の恋の激しさを賞賛する評語的部分を持ち、身分が違

い、親に反対されながらも恋に殉じる、恋愛至上主義的な情熱の物語であり、『一条撰政御集』が積極的にその姿勢を受け継ごうとしている」と指摘する。加えて、現在と比較することによる過去の上位性が示されており、「懐旧」の意識という面からも同集が『伊勢物語』からの影響を受けているものと理解される。

以上のような類似点が見られる一方で、冒頭部には相違点も確認される。「いひかはしけるほどの人は、とよかげにことならぬ女なりけれど」について『一条撰政御集注釈』（以下『注釈』とする）は以下のように指摘する。

伊勢物語では、「身はいやくして、いとになき人を思ひかけたり」というように、自分よりこの上なく身分の高い女に思いをかける話が多いが、それに対し、豊蔭も身分は低い、女も同等の身分であったと説明することになったのであろう。伊勢物語を下にふまえての語り方である。

『注釈』では両作品の語り方の類似と対称が指摘されている。豊蔭の相手とされる女が「とよかげにことならぬ女」であることは、同集の恋愛に対する意識が端的にあらわれており、『伊勢物語』との相違点として捉えられる。長谷川政春氏が『伊勢物語』では男が自分よりも身分の高い女に懸想する話が多いのに対して、「豊蔭」は自分と同等の身分の低い女を相手にする色好み話である」と述べているように、『伊勢物語』と『一条撰政御集』が指示する恋愛の対象となる女性は大きく異なっている。そして、それは両作品における主人公の「色好み」の人物造型に相違をもたらすものでもある。

『伊勢物語』の主人公が手の届かない女に情熱的な愛情を傾けるのに  
対し、『一条摂政御集』では自分と同等の身分の低い女を恋愛の対象と  
する。そこには益田勝実氏が「<sup>(9)</sup>好色者」の下降」とする「色好み」の  
劣化を見ることが出来る。二つの作品をつなげる「色好み」のモチーフ  
において見られる隔絶が、冒頭に確認されることは示唆的である。『一  
条摂政御集』における「色好み」の劣化は、作品の全体像を把握する上  
ではっきりとした指針となるものである。

『一条摂政御集』の冒頭歌の連なりは、『伊勢物語』の影響を多分に受  
けていると推察され、『伊勢物語』の持つ恋の情熱を受け継ぎながら、  
同歌集が編まれていくことを示す書き出しとなっている。そして、その  
一方ですでに二つの作品の相違が表れていることを押さえておきたい。

続いて四、五番歌を見てみよう。

『一条摂政御集』四、五番歌

をなじ女に、いかなる折にかありけむ

4 からも袖に人めはつゝめどもこぼるゝものは涙なりけり

女、返し

5 つゝむべき袖だに君はありけるをわれは涙にながれはてにき

年を経て、上衆めきける人のかういへりけるに、いかばかりあは  
れと思ひけん。これこそは女はくちをしようも、らうたくもありけ  
れ。

贈答歌で頻繁に使われる「涙」のイメージであるが、ここでは『伊勢  
物語』一〇七段の歌との関連が想起される。

『伊勢物語』一〇七段

(前略) さて、男のよめる。

つれづれのながめにまさる涙河袖のみひちてあふよしもなし  
返し、例の男、女にかはりて、

あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへ流ると聞かば頼まむ

といへりければ、男、いといたうめでて、いままで、巻きて文箱に  
入れてありとなむいふなる。

「袖に涙」のイメージを用いて女への想いがよまれている点に類似が見  
られる。加えて『一条摂政御集』三番歌も絡ませることで、更に二つの  
作品の類似が捉えられる。

『一条摂政御集』三番歌

宮仕へする人にやありけん、豊蔭ものいはむとて、「下に今宵は

あれ」といひおきて暮らすほどに、雨いみじう降りければ、その

こと知りたりける人の、「上になめり」といひければ、豊蔭

3 をやみせぬ涙の雨にあま雲ののほらばいとわびしかるべし

なさけなしと思ひけん。

『注釈』が「いみじう雨の中を女のもとへやってきた男の誠意を語った  
ものとして、落窪の少将や、伊勢物語百七段などはあまりにも有名であ  
る」とするように、ここにも『伊勢物語』一〇七段との類似が見られる。

『一条摂政御集』の三、四、五番歌を連続して見ることで二つの作品の  
関係がはっきりしたものになる。

冒頭歌から五番歌の左注について曾根誠一氏は「好色者豊蔭像の造型  
に最も重要な役割を果たしていたのは左注であった<sup>(10)</sup>」と指摘している。

二番歌、五番歌の左注に見られる「はやうの人はかうやうにぞあるべき。いまやうの若い人は、さしもあらで上衆めきてやみなんかし」、「年を経て、上衆めける人のかういへりけるに、いかばかりあはれと思ひけん。これこそは女はくちをしようも、らうたくもありけれ」とあるのは「好色者」としての主人公を端的に説明しているものである。そして、それは『伊勢物語』の人物造型に依拠したものであると考えられる。

しかし、先にも述べたように二つの作品の「色好み」は同じものではない。三番歌の左注に「なさけなしとや思ひけん」とあるのは、豊蔭が女を薄情に思ったという心情をあらわし、それは豊蔭の恋に対する消極的な姿勢へとつながり、その「色好み」が『伊勢物語』に見られたような身を破滅させる恋に向かつていくものではないことを示している。それを受けてか、続く六、七番歌で恋の進展を見ることはできない。

#### 『一条撰政御集』六、七番歌

女の親聞きて、いとかしこういふと聞きて、豊蔭、まだしきさまの文を書きてやる

6人知れぬ身はいそげども年を経てなど越えがたき逢坂の関

これを、親に、このこと知れる人の見せければ、思ひなほりて返事書かせけり。母、女に祓をさへなむせさせける

7あづま路に行きかふ人にあらぬ身はいつかは越えん逢坂の関

心やましなに年も経たまへ、と書かす。

女、かたはらいたかりけんかし。人の親のあはれなることよ。

「女の親聞きて、いとかしこういふと聞きて」とあり、女の親族が恋の障害となることで『伊勢物語』五段が連想され、ひいては『伊勢物語』

の主要モチーフの一つである「禁忌の女」のイメージが意識されることになる。また「母、女に祓をさへなむせさせける」とあるのは、『伊勢物語』六五段で男が自分の恋を止めるために祓をしたことに類似する。『伊勢物語』六五段

(前略) この男、「いかにせむ。わがかかる心やめたまへ」と仏神にも申しけれど、いやまさりにのみおぼえつつ、なほわりなく恋しうのみおぼえければ、陰陽師、神巫よびて、恋せじといふ祓への具してなむいきける。祓へけるままに、いとど悲しきこと教まさりて、ありしよりけに恋しくのみおぼえければ

恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかなといひてなむいにける。

「身もいたづらになりぬべければ、つるに亡びぬべし」とする男の恋心を止めるために祓をしている場面であるが、七番歌の詞書に「母、女に祓をさへなむせける」とあるのは女の恋心を止めるためのものであり、違いが見られる点をおさえておきたい。

七番歌で女の親が娘に「あづま路に行きかふ人にあらぬ身はいつかは越えん逢坂の関」と冷たい返事を送ることで同歌群は結ばれる。三番歌から七番歌が連続性を持ち、女の親が恋の障害となる点は『伊勢物語』六五段が引用された構成がとられ、二つの作品の距離は近づいているようである。しかし、『伊勢物語』六五段で男が身を破滅させる情熱的な恋を描いているのに対し、『一条撰政御集』ではその引用は表現のレベルに留まっており、「色好み」「禁忌の女」のモチーフが押し出されることはない。

それは七番歌が「女、かたはらいたかりけんかし。人の親のあはれなることよ」と結ばれていることから間接的に示されている。ここでは歌群で示されてきた恋愛が希薄化し、親と子の関係という新たなモチーフに代行されている。豊蔭の「色好み」が徹底されていないことで、恋のモチーフも明確に貫かれることがないのである。

八番から十一番歌でも『伊勢物語』の影響が見られる。

『一条摂政御集』八番から十一番歌

豊蔭、大炊御門わたりなりける人に通ひける。人おはかりけるなかに、男の、家の前をつねに渡りて、ものもいはざりければ、女8雲るには渡るときけど飛ぶ雁の声きゝがたき秋にもあるかな男、返し

9雲るにて声きゝがたきものならばたのむの雁も近くなきなむ

またたちかへり、女

10言伝てのなからましかばめづらしきたのむの雁も知らでぞあらし

豊蔭来ずやなりにけん、女

11おもふことむかしながらの橋柱ふりぬる身こそかなしかりけれ

九番歌に見られる「たのむの雁」の表現が『伊勢物語』十段にある二つの歌に拠ったものと指摘されている。<sup>11)</sup>また、十番歌、十一番歌では「家の前をつねに渡る」男に対して女の恨みがよまれているが、それは『伊勢物語』十九段で男と女が「同じ所なれば」と宮仕えをしている状況、

二七段で男が女の歌を物陰で立ち聞きしている状況に類似している。空間的には近くにいながら思いを寄せることがなくなった男に対する女の

恨みを共通して見ることができるといえる。

しかし、『伊勢物語』十段は女の親と男との歌の贈答となっており、話の内容に関連を見出すことは難しく、十九段と二七段も歌の贈答が成立しているという点で描かれた内容は異なっている。『伊勢物語』十九段、二七段ではその内容はともかく、男からの返歌がなされ二人の間にコミュニケーションが成立しているが、<sup>12)</sup>『一条摂政御集』では男の返歌は見られず女が空しく歌をよむのみである。女が男を待ち続けて一方的に詠歌する話としては『伊勢物語』二三段後半の大和の女が思い出されるが、その描かれ方は戯画的でさえある。同様に当該箇所では女が恨みの歌を独詠することで、女の憐れさや孤独感が強調され、男の薄情な姿が際立つこととなる。このように、二つの作品において男の行動を中心とした相違点を抽出することができる。

男の返歌が見られないことで、コミュニケーションの不在があらわれるとともに、男の行動は「色好み」から外れた姿として浮かび上がる。『伊勢物語』の「みやび」について秋山虔氏が「自らの情動を歌という言葉の秩序に転移することによって心の流露を求める態度」と述べていることを思い起こせば、『伊勢物語』における男の詠歌の重要性は明らかであろう。詠歌行為によって主人公は「みやび」を体現することになるのだが、『一条摂政御集』の当該箇所では返歌がないことは、同集の主人公が「色好み」の人格において『伊勢物語』よりも劣ったものであることにつながっていく。

二〇番歌では『伊勢物語』と対照的な人物像を見ることができるといえる。

『一条撰政御集』二〇番歌

この女、豊蔭にかく忍びつゝあるも、びなき人にやありけん、聞く人のいみじういひければ、このことやみなむなど契りて、あしたになほかなしかりければ、男にやりける

20 忘れなん今はおもふをりにこそありしにまさるもの思ひはすれ

これを豊蔭ひき開けてみるに、さらにいふべき心地もせず、あはれにいみじと思ひて、一日二日さしこもりて泣きけり。

「聞く人のいみじういひければ、このことやみなむ」とあるのは、お互いに想っていないながらも止めざるを得なかった恋愛が描かれていることを示す。それは『伊勢物語』に見られる「二条后物語」をはじめとした

「得ることの難しい女」との恋事を反映しているものと理解される。

左注に注目したい。女から送られた二〇番歌に対して男は「さらにいふべき心地もせず」と失望をあらわすだけで返歌を送ることはできない。ここでの男の態度には情熱的な「色好み」の姿を見ることはできない。

『伊勢物語』では情熱的な恋心をもって「禁忌の女」「得ることの難しい女」に接近していく主人公の「色好み」が物語を通して描かれている。

一方、『一条撰政御集』の豊蔭は「さらにいふべき心地もせず」とあるように、恋の情熱が欠如した主人公であり、その行動は身の破滅を省みないような激しいものではありえない。そこからは「色好み」という観点から『伊勢物語』の主人公の『一条撰政御集』に対する優位性が指摘される。

ここで「色好み」を中心とした今までの考察とは異なる視点から二つ

の作品を比較してみたい。

『伊勢物語』では「東下り物語」をはじめとして、主人公が深い内省的态度を示す段が確認されるという特徴が捉えられる。そこで、『伊勢物語』の影響を受けていると見られる『一条撰政御集』ではそれらの意識をどのように扱っているかについて考えてみよう。

『一条撰政御集』二九、三〇番歌

この史生、おなじ女のもとにまかりたりけるに、女のけしきやいかゞありけん、立ちながらまかり帰りて、又のあしたに

29 寝てゆけといふ人もなき秋の夜は袂におきし露さへぞ憂き

返し

30 色にいでていはねどしるき言の葉にかゝらぬ露やつらきなりけん

注意したいのは「露さへぞ憂き」の表現である。『伊勢物語』では「憂し」が「京やすみ憂かりけむ」（八段）というように内省的な表現として用いられていたが、二九番歌では男女の仲を表わす表現として用いられている。また、九九番、一〇〇番歌にも「憂し」が使われているが、同様に男女の仲についての表現と理解される。

『一条撰政御集』九九、一〇〇番歌

女、石と瓦とをつゝみて

99 わが仲はこれとこれとにけりたのむと憂きといづれまされり

返し、本院にこそ

100 これはこれ石と石とのなかはなかつたのむはあはれ憂きはわりなし

『伊勢物語』八段が「憂し」を内省的な意識を導くために用いているのとは異なり、同集で示されるのは「男女の仲」という限られた範囲内

での用例である。『一条摂政御集』では他にも「身をなきものに」(九六番歌)「身をすてて」(一八四番歌)<sup>(15)</sup>など一見すると厭世的、内省的な意識につながるような表現が確認されるが、それらも男女の仲についての表現として用いられ、『伊勢物語』の「東下り」に見られる意識との関連は薄い。ともに恋愛をモチーフとしている作品でありながら、『伊勢物語』ではその恋愛の挫折をきっかけとして内省的な意識が導かれ、『一条摂政御集』ではそれらの意識が浮上して行くことはない。これらの点からも二つの作品の間に隔絶を認めることができる。

『伊勢物語』では主人公が情熱的な恋愛に身を打ち込み、挫折することによって、孤独や厭世を抱え込む内省的な意識が描かれている。その典型的な例として「東下り」や五九段の「東山籠り」などがあげられるが、そこで主人公が持ち得る内省的な意識は、「色好み」のモチーフに基づき真摯な恋愛によってもたらされたものである。

一方、『一条摂政御集』では主人公が数々の恋愛を体験するものの、そこから内省的な意識を得ることはない。今まで見てきた『伊勢物語』で描かれた恋との落差と関連付けてみれば、同集において「色好み」としての主人公が徹底されず、中途半端とも言える状況におかれていることがその理由として浮かび上がってくる。深い内省につながる恋愛を実践できない主人公には、例えば『伊勢物語』で見られた「憂し」の用法が付随することはなく、それは恋の表現のみに留まっているのである。

主人公が内省的な人格を持ち得ずに、常に俗的な事象に関わる姿は以下の例でも確認することができる。出家について語られている『一条摂政御集』一八四番から一八六番歌を見てみたい。

『一条摂政御集』一八四番から一八六番歌

このおとど、北の方とゑじたまて横川にて法師にならむとしたまふに、法師して、あどの

184 身をすててこゝろのひとりたづねればおもはぬ山もおもひやるかな

おとど、返し

185 たづねつゝかよふ心し深からばしらぬ山路もあらじとぞおもふ

又、あどの

186 なよたけのよかはをかけていふからにわが行く末の名こそ惜しければ出家が主題とされながらも、そこでは男女の仲についての言及が中心となっており、出家による厭世、無常などの深化された意識を見ることはできない。『伊勢物語』と『一条摂政御集』の間には心的な意識において大きな格差が存在しているのである。

三一 一番歌から四一番歌は同集の中で最も連続した歌群となっている。

三二、三三 一番歌の詞書にも『伊勢物語』を連想させる表現が見られる。

『一条摂政御集』三二、三三 一番歌

豊蔭、中御門わたりなりける女を、いと忍びてはかなき所に率てまかりて、帰りてあしたに

31 かぎりなく結びおきつる草枕このたびならず思ひ忘るな

返し

32 草枕むすぶ旅寝を忘れずはうちとけぬべきこゝちこそすれ

「いと忍びてはかなき所に率てまかりて」とあるのを『注釈』では『源氏物語』夕顔巻の「夕顔を連れこんだ河原の院」を一例としてあげてい

るが、『伊勢物語』六段の逃避行を思い起こすことも可能だろう。三一、三二番歌は後朝の歌の贈答となっており、設定にも類似が見られる。

続く三三、三四番歌ではその逢瀬が夢のようなものであったことが記されている。

『一条摂政御集』三三、三四番歌

翁、いかなることをかいひおきけん

33 さめぬとて人に語るな寝ぬる夜の夢よ〜といひし言の葉

返し

34 あはすべき人もなき夜の夢なればさめつるほどに忘れにけり

三三番歌に見られる「寝ぬる夜の夢」に注目してみたい。『伊勢物語』

一〇三段にも同様の表現が用いられている。

『伊勢物語』一〇三段

むかし、男ありけり。いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけり。深草の帝になむ仕うまつりける。心あやまりやしたりけむ、親王たちのつかひたまひける人をあひいへりけり。さて、

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

となむよみてやりける。さる歌のきたなげさよ。

女とのほかない逢瀬が「寝ぬる夜の夢」の表現によって示されている。また、逢瀬をはかない夢に例える表現は六九段にも見られる。

『伊勢物語』六九段

(前略) 男、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何ごとも語らはぬにかへりにけり。

男、いとかなくして、寝ずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、詞はなくて、

君や来しわれやゆきけむおもほえず夢かうつつか寝てかきめて

か

男、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何ごとも語らはぬにかへりにけり。

『一条摂政御集』三三、三四番歌と『伊勢物語』六九段に見られる相

ここで注意しておきたいのは、夢のような逢瀬をモチーフとした歌の贈答は設定としては類似しているが、それに反して深層のレベルで示される内容が異なっている点である。

『伊勢物語』六九段では女⇨斎宮から「昨夜の逢瀬が夢であったのか現実であったのか」と問いかけがなされ、男から「それを今夜確かめましょう」とする返歌が送られる。そこでは、はかない夢のような逢瀬を仲立ちにした二人の心の交流が描かれている。

一方、三三番歌で翁が逢瀬における情熱的な心情をよみかけたのに対して、三四番歌で女が「さめつるほどに忘れにけり」と返したことは、『伊勢物語』六九段の贈答歌と意味のレベルで相違が見られる。『注

釈』では三四番歌を「二人の関係を相談すべき人がいない、私はひとりぼっちだとの意である。「わすられ」の語に、女のあきらめの気持が表れている」と解釈しており、恋に対する女の否定的な思いを捉えている。それは、『伊勢物語』六九段における禁忌を侵してまで実行された逢瀬とそれに伴う二人の心の交流とはかけ離れたものである。

『一条摂政御集』三三、三四番歌と『伊勢物語』六九段に見られる相

違点を看過することはできない。両者とも「はかない夢」に例えた逢瀬について的心情をよんでいるが、『伊勢物語』六九段ではそれはお互いの共感を呼び、『一条撰政御集』三三、三四番歌では男女の意識の齟齬を示すことになった。「夢」という共通した語を用いて逢瀬のはかなさが描かれているものの、両作品には大きな相違が横たわっている。そこには同じように夢のような逢瀬を体験したのにも関わらず、そこで培われた二人の交流がまるで異なることが示されている。

三五番歌から四一番歌も同じ女とのやり取りが描かれており、四〇番、四一番歌に至って二人の関係は終焉を迎える。

『一条撰政御集』四一番歌

翁のひさしうまからざりければ

40 逢ふことのほどへにけるもこひしぎの羽の数にぞ思ひ知らるゝ

この翁、たえてひさしうなりにける人のもとに

41 ながき世につきぬ嘆の絶えさらばなにに命をかけて忘れん

おほやけごといそがしきころにて、これが返しをえせずこそなりにけれ

四〇番歌の詞書で翁の訪問が途絶えがちになったことが示され、物語的部分の最後の歌となっている四一番歌は久しく訪れていない女に送った歌となっている。

四一番歌の後書「おほやけごといそがしきころにて、これが返しをえせずこそなりにけれ」とあるのは、男が返歌をしなかったことについての指摘と捉えることが適切であると考えられる。<sup>16)</sup> 物語的部分の最後の段階にきて、男が「おほやけごと」に縛られてしまい、情熱的な恋に身

をついやす「色好み」ではありえなかったことが記されているのは深い意味を持っている。それは『伊勢物語』における「二条后物語」や「斎宮物語」で身の破滅を省みないような「色好み」の体現とは大きな距離を示すことになるのである。そしてそれは、『一条撰政御集』の主人公の人物造型が『伊勢物語』に比べて「色好み」の資質という面で劣化したものであることを証明することにもつながっていく。<sup>17)</sup>

『一条撰政御集』と『伊勢物語』は文体や表現、モチーフのレベルでいくつかの類似が見られ、それは『一条撰政御集』が『伊勢物語』から受けた確かな影響である。しかし、それらの類似は表層のレベルで認められるに留まり、描かれている内容については大きな違いが確認される。その最たるものとして「色好み」の資質があげられ、それが二つの作品の大きな差異を導いていると考えられる。

### 三、藤原伊尹の実像と虚構化

人物造型の面で二つの作品を比較した時、「色好み」の人物造型における『伊勢物語』の優位性を確認することができる。つまり、『一条撰政御集』は『伊勢物語』の主人公像を強く意識しながらも、その「色好み」像には到達することができなかったと想定されるのである。<sup>18)</sup> 益田勝実氏が端的に「『伊勢物語』の文学的達成を〈好色者〉憧憬の結晶、心のエロチシズムの高い到達とし、歌物語の主人公としての昔男―平中―豊蔭を、〈好色者〉の下降の系譜」として捉えていることは重要である。主人公の人物造型の面から考えれば、『一条撰政御集』は『伊勢物語』

を意識しながらも、そこには届かない低い位置に留まっている。その要因の一つとして、実在の伊尹と『一条撰政御集』の関連を取り上げてみたい。

伊尹の「色好み」について同時代の他作品と連携させながら考えてみたい。三一番歌に「豊蔭、中御門わたりなりける女を、いと忍びてはかなき所に率てまかりて」とあるが、「中御門わたりなりける女」は『拾芥抄』の記述から本院侍従であると捉えられる。<sup>(20)</sup>伊尹が関係する本院侍従をめぐっての記述を他作品からも確認しておこう。

伊尹の「色好み」を示すエピソードとして注意されるのは『本院侍従集』二八番歌から三〇番歌である。そこには伊尹自身は登場しないが、周辺に伊尹の姿が認められる。

『本院侍従集』二八番歌から三〇番歌

かくてすみ給ふほどに、この女又ひとにぬすみていにければ、  
とこいみじうなげき給ひて、女あはれと思ひかくなむいひやりける

28世の中を思ふもくるしおもはじと思ふも身にはやまひなりけり

男かへし

29忍ぶれど猶忘れず思はゆるやまひは君に我ぞまされる

女

30思はずもある世中のくるしきにまさるやまひはあらじとぞ思ふ  
兼通の通っていた本院侍従が「ひとにぬすみていにければ」とされて  
いるが、連れ去った人物は伊尹であると理解される。<sup>(21)</sup>そこには女を強奪す

る伊尹の姿が見られ、その行為を「強引に盗み出す伊尹の男らしさ」として捉えることが可能であり、それは「色好み」の資質に他ならないものである。

しかし、その「色好み」的行為も一貫したものではありえない。『拾遺和歌集』巻十九には伊尹が冷たい態度をとる女に対して恨みを訴えるが、それに対して「承香殿女御に侍ける女」すなわち本院侍従が抗弁する歌が載せられている。

『拾遺和歌集』一二六三番歌

一条撰政下臈に侍ける時、承香殿女御に侍ける女に忍びて物言ひ侍けるに、さらにな訪ひそと言ひて侍ければ、契りし事ありしかばなど言ひ遣はしたりければ

それならぬ事もありしを忘れねと言ひし許を耳に留めけん

ここで「一条撰政」は伊尹が「契りし事ありしかばなど言ひ遣はしたりければ」として女を恨む様子を見せるのは「色好み」の資質としては疑わしいものである。女の「さらにな訪ひそ」とする言葉にかこつけて、「二度と訪ねないと約束したことがあったので」として女の側に責任を負わせようとする姿には「色好み」がもつはずの情熱は認められない。『伊勢物語』の「色好み」が身の破滅を賭してまでも恋に向かっていたような姿をここに見ることはできないのである。

以上のように『一条撰政御集』・『本院侍従集』・『拾遺和歌集』を連関させることで、藤原伊尹の姿が浮かび上がってくる。そして、その連関の中で『一条撰政御集』における「色好み」の問題を見ることができ、『本院侍従集』では女を奪い去る情熱的な姿が見られる一方で、『拾遺和

歌集』では「色好み」の概念にそぐわない行動も確認される。

数々の恋愛を重ねる伊尹は「色好み」のように振舞っていたかもしれないが、その「色好み」は成熟されることはない。それは『伊勢物語』の「色好み」からは遠い場所にある、生半可な「色好み」とも言えるものであるのではないだろうか。そして、そのことは『一条摂政御集』の人物造型にも大きな影響を及ぼすことになる。

#### 四 『一条摂政御集』の背景―物語と私家集の異相

以上の考察では『一条摂政御集』と『伊勢物語』の比較を通して、「色好み」としての主人公について、二つの作品の人物造型における差異を見てきた。以降ではそこで見られた「色好み」の差異が、どのような要因に依拠しているのかを考えてみたい。

まず一つとして、実在の伊尹が「色好み」であったのかどうかという問題が想定される。前節で考察したように、伊尹に見られるのは生半可な「色好み」の姿であると言えよう。『宇治拾遺物語』の「また色めかしく、女をも多く御覧じ興せさせ給ひけるが」や『続古事談』の「弘徽殿のはそどののつばにいらりて、あさばらけに、冠おし入て出給ければ」の記述が「色好み」を示しているが、それらは『一条摂政御集』によるものであると考えられる。実際の伊尹については『大鏡』に「たゞ御かたち・身のさへ、なに事もあまりすべれさせたまへば」とあるように、優れた人物と認知されていたことが知られるが、「色好み」としての性格が示された記述は確認できない。

ここから、『一条摂政御集』と『伊勢物語』の間に生じた「色好み」

に関する相違を、『一条摂政御集』が物語として創作されたものではなく、伊尹の私家集であるということに拠っていると考えてみたい。つまり、実在の伊尹の姿が強く結びついていることが同集の「色好み」の意味づけを大きく左右しているのである。

益田勝実氏が同集について「内容において自作歌集成をふみはずさず、想像の物語、想像のうたの贈答をまじえない。そのために歌物語の伝承的要素を再生しえないで、私家集にとどまっている」と指摘する<sup>(24)</sup>点は重要である。豊蔭なる人物に仮託されて家集は虚構化が進められているものの、伊尹の自作歌という制約の中ではそれは完全な物語化を達成することはできないのである。それは『伊勢物語』が業平の歌だけでなく、『古今集』『万葉集』所載歌も含めた様々な歌を加えて構成されていることと確かに異なっている<sup>(25)</sup>。

さらに、『一条摂政御集』と実在の伊尹との関連にこだわろう。『伊勢物語』の「色好み」に到達することができない背景には伊尹が必ずしも「色好み」ではなかったことが深く影響している。『伊勢物語』が業平幻想<sup>(26)</sup>の中で虚構化を推し進め「色好み」を描いたのに対して、私家集である『一条摂政御集』では、伊尹が背後に意識される豊蔭は「色好み」を演じきることはできなかった。益田氏が指摘する「私家集にとどまっている」同集は、物語としての虚構への跳躍は見られず、現実との接触を背後に見ることが強要されるのである。『一条摂政御集』が伊尹の自作歌によって構成されていることで現実と間近にあり、それは『伊勢物語』のように虚構が押し出された物語とは自然と異なってくるのである。

『伊勢物語』からの影響として「色好み」に関しての言及を進めてきたが、『伊勢物語』の時代と伊尹を取り巻く時代では「色好み」の概念が異なってきたことも確認しておきたい。益田氏が伊尹の「色好み」を時代性で捉え「本来愛情の探求から熱い人間性の回復がめざされねばならなかった好色が、次第に愛情の探求の烈しさをすてて、風流な行為、情緒に富んだふるまいに移行して行ってしまう時の流れの上に彼が立っていたからである<sup>(27)</sup>」と述べるのは、「色好み」の概念の変化を指摘することに他ならない。時代の変化により「色好み」的な行為が風流な行為として認識されることとなり、それは『伊勢物語』に見られるひたむきな情熱に裏打ちされた「色好み」の行為とは一線が画されている。

片桐氏が『後撰集』を「宮廷女房社会における色好みの和歌を集めた」勅撰集であるとし、『一条摂政御集』との同一の基盤を見ている点に注意しよう。<sup>(28)</sup>そこでは「色好み」の歌が多くよまれたことの時代性が読み取られ、確かに「色好み」が同時代に志向されたものであったことが示されている。しかし、同時にそれは前時代に『伊勢物語』の主人公が見せた「色好み」とは異なるものであることを証明することにもなる。

また、初段や四十段の記述は『伊勢物語』自体が過去の視点で「色好み」を顕在化しているとも言えること<sup>(29)</sup>もでき、それならばなおさら「色好み」の概念は十世紀後半の『一条摂政御集』の時代には異なった意義で捉えられるはずである。すなわち、ここでは『伊勢物語』に見られた情熱的な恋愛を志向する英雄的な「色好み」の姿ではなく、日常生活と密接に結びついた日常性を持った「色好み」があらわれざるを得ない。

『一条摂政御集』が伊尹の私家集であるという事実を思い出してみた

い。同集が伊尹という人物を背後に抱えていること、その時代性に抱えられた「色好み」を意識していることを踏まえれば、その主人公である豊蔭が「ことならぬ女」との恋愛に向かつていくことに必然性が見出されるのである。

## 五. おわりに

以上の考察から、『伊勢物語』と『一条摂政御集』の間には類似点と同様に相違点も強く捉えられた。そして、それは二つの作品の異なる性格を顕著にあらわしているのである。

その一つとして、歌物語と物語的家集の距離が明示されている点がありげられる。私家集である『一条摂政御集』が物語化を進めるにしてもそれが徹底されることは難しく、実在の伊尹に束縛されたものであることが確認された。そこには物語的家集の虚構化の限界があらわれていると言えるだろう。たとえば実在の伊尹の私家集であるという制約は、『伊勢物語』から「色好み」のモチーフを踏襲しながらも、実在の伊尹が背後に意識されることで十分に成熟することはない。それは文学作品の虚構化の問題とも結びついており、物語に類似しながらも、そうではあり得なかった物語的家集の特徴を示すものである。

また、「色好み」の概念の変化も二つの作品間に確認することができ、『一条摂政御集』はその成立・構成を『伊勢物語』に多く拠っているが、『伊勢物語』に見られた「色好み」が純粹に踏襲されることはなく、そこには到達できない「色好み」の姿が描かれている。『伊勢物語』が恋の情熱に真摯な「色好み」としての主人公を造型し、その挫折によ

る深い内省までを描いたのに対して、『一条摂政御集』ではあくまでも日常的な恋愛を重ねた豊蔭の姿を見せるのみである。十世紀後半という時代性を現実として持ち得たことで、その「色好み」はすでに『伊勢物語』とは一致するものではなくなっている。そして、同集においては「色好み」のモチーフが深化されることはないのである。

以上のように、『一条摂政御集』は『伊勢物語』の影響を受けて制作され、類似点を多く持ちながらも、作品を大局的に見たときその相違点が強く意識される。それはそれぞれの作品に依拠するものであると同時に、歌物語と物語的家集の差異という問題にもつながるものと考えられる。そして、それは物語的家集が歌物語の影響を受けて作られたものの、その形式や時代性により、結果的に異なる方向へと向かっていったことを表していると思われるのである。

\* 『一条摂政御集』の本文は『新日本古典文学大系 平安私家集』、『伊勢物語』の本文は『新編日本古典文学全集』、『本院侍従集』は『新編国歌大観』、『拾遺和歌集』は『新日本古典文学大系』によった。

注

- (1) 日向一雅「後撰和歌集の前後」『日本文芸史 表現の流れ 古代2』河出書房新社一九八六年
- (2) 平安文学輪読会の『一条摂政御集注釈』（塙書房一九六八年）、片桐洋一氏の『一条摂政御集』について『古今和歌集以後』（笠間書院二〇〇〇年）等でも、二つの作品の類似が指摘されている。

- (3) 益田勝実「伊井\*「とよかげ」との間」『国文学』一九八一年四月
- (4) 『注釈』や片桐同2前掲論文に指摘がある。
- (5) 『新日本古典文学大系 平安私家集』の脚注にその指摘が見られる。
- (6) 「大藏史生」とあることについて、同集に「律令機構よりの自己解放としての愛情探求という意図」を見る山口博氏の考察（『大藏史生豊蔭という事一家集「豊蔭」の一問題」『平安文学研究』一九六一年十二月）、『一条摂政御集注釈』の補注で「色好みには、財力が必要である」とし、「大藏史生とは、身分は低くても、財力のある者というイメージが当時ありえたのかもしれない」とする指摘などがある。本稿ではこの点についてほとんど触れられなかったが、今後追求する課題だと捉えている。
- (7) 宮谷聡美『「とよかげ」の「あはれ」』『古代研究』一九九四年九月
- (8) 長谷川政春「豊蔭物語」『体系物語文学史 第三卷』有精堂出版一九八三年
- (9) 益田同3前掲論文
- (10) 曾根誠一『「とよかげ」の方法』『古典和歌論叢』明治書院一九八八年
- (11) 『新日本古典文学大系 平安私家集』脚注による。
- (12) 十九段「天雲のよそにのみしてふることはわがある山の風はやみなり」、二七段「みなくちに我や見ゆらむかはづさへ水の下にてもる声に鳴く」と男の返歌がなされている。
- (13) 秋山虔「伊勢物語・「みやび」の論」『国文学』一九七九年一月
- (14) 宮谷聡美氏は「あはれにのみじと思ひて」を重視することで、当該箇所を「男と女は共通の基盤に立っており、女の心情を男が評価する」（宮谷同7前掲論文）と肯定的に捉えているが、本稿では「さらにいふべき心地もせず」に重点を置いて解釈する。
- (15) 九五番歌「恋しきをつみにて消ゆるものならば身をなきものになしつゝや見ん」一八四番歌「身をすててころのひとりたづねればおもほぬ山もおもひやるかな」などの表現が用いられているが、男女の仲についての表現として解釈されるものに留まっている。
- (16) 『新日本古典文学大系平安私家集』脚注の説をとる。『注釈』では、単に女の返歌がなかったとする解釈の可能性も示しているが、文脈から判断した時に意味が通りにくくなるため首肯できない。

(17) 『伊勢物語』では「私」と「公」の葛藤が「惟喬親王物語」などの後半部にあらわれそこにも私的な情熱を見ることができるとは、ここでは主に前半部の恋物語に対する主人公の情熱を想定している。

(18) 宮谷氏は『とよかげ』は『伊勢物語』を忠実に受け継ごうとしたが、実際には、『伊勢物語』を『とよかげ』独自の論理で捉えた。すなわち、『とよかげ』は『伊勢物語』の「よむ」歌の物語を「あはれ」という言葉で捉えたのである(宮谷同7前掲論文)とする。

(19) 益田同3前掲論文

(20) 『拾芥抄』の「本院中御門北堀河東左大臣時平家」の記述が参考となる(本文は尊経閣善本影印集成『拾芥抄』八木書店一九九八年による)。

『注釈』補注に詳細な考察があり、中務の娘とする可能性もないではないとしながら、本院侍従とすることの妥当性を指摘している。木船重昭『本院侍従集全釈』(風間書房一九九一年)には「このなかどみかどあたりというのが「拾芥抄」によれば「本院中御門北堀河東左大臣時平家」、「土御門以上を北辺、中御門以上を一条」左大臣藤原時平の邸宅「本院」をさすと思われる」とある。

(21) 木船同20前掲論文や『注釈』にも指摘が見られる。

(22) 『注釈』の指摘による。

(23) 『宇治拾遺物語』の本文は『新編日本古典文学全集』、『続古事談』の本文は『新日本古典文学大系』による。

(24) 益田同3前掲論文

(25) また、『伊勢物語』が中国小説や歌語りの影響を受けて、虚構化されたことも成立事情としては大きな相違点である。

(26) 業平が皇統の人物であることも大きな意味を持つだろう。「血統を受けて平城天皇の孫として生まれた業平は、憧憬の対象として崇拜され賛美される出自を担っていたのである」(小町谷照彦『源氏物語ハンドブック』新書館一九九六年)とあり、業平は優れた人物として造型される必然性を持ちえていた。

(27) 益田勝実「豊蔭の作者」『益田勝実の仕事2』(ちくま学芸文庫二〇〇六年)

(28) 片桐同2前掲論文。また、片桐氏が同論文において実頼の『小野宮殿

集』、師輔の『九条殿集』、師氏の『海人手子良集』、伊尹の『一条撰政御集』を藤原氏の「色好み」の「個別的な現れ」としていることも興味深い指摘である。

(29) 初段の「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」、四〇段の「むかしの若人は、さるすける物思ひをなむしける。今のおきな、まさにしなむぞ」の記述が注意される。